

体験飛行を 1.5 倍に増加 飛行場まつり

ドクターヘリ導入も容認 調布飛行場対策協議会

去る 8 月 26 日、調布飛行場対策協議会が開かれ、東京都からあった提案を、すべて了承した。その中には、飛行場まつりの体験飛行の 1.5 倍化や、ドクターヘリの導入など、毎日の騒音被害を受けている立場からは、到底看過することのできないような内容も含まれている。了承するに当たり、周辺住民に配慮するような発言は、当会会員である M 委員以外からは、ほとんどなく、この協議会のあり方そのものが、問われる内容であった。さらに言えば、現在、この協議会の結論が、事実上、調布市の飛行場政策となっているが、市議会の特別委員会の権限強化等の抜本対策が必要なのかも

知れない。
体験飛行の増加
体験飛行は、昨年 14 回であったのに対して、今年は、なんと 21 回である。調布市の説明によると、調布、府中、三鷹 3 市の地元枠を設けたことから、増加したという。しかし、それでは本末転倒である。そもそも、なぜ地元枠を設けたのか。
地元枠を設けるきっかけとなったのは、大須賀市議の粘り強い働きかけである。3 年前の、平成 17 年 8 月 26 日の、調布市議会調布飛行場等対策特別委員会（以下、特別委員会）において、次のように発言している。

「体験飛行なんですけども、対象者、来場者の中から抽選で搭乗者を決定するとありますよね。そうすると、飛行場まつりに来たどこの市民であろうが乗せるということになるかと思うんですが、私はそれは制限を加えてもらいたいと思います。まず第 1 の制限は、当然地元 3 市に居住する者。それから、第 2 としては、私、できるだけ子供たちを乗せてあげたいんです。実際に去年の実績で子供たちがどのくらいいるかわからないんですけども、単純な話、飛行機が大好きな大人よりも、子供たちを乗せたいということです。それが聞き入れられるかどうかはちょっとわかりませんが、一応検討に加えていただきたいということで伝えていただけるとありがたいと思っています。

1 点目についてはぜひ強く希望します。当然、地元の関係で飛行場まつりはやるわけですから、全然関係ない、ただの飛行機好きの人が乗りたいと言って頑張ってもらったって、はっきり言って、私は嫌です。当然地元 3 市の方に限定していただきたいと思っています。」

さらに、1 ヶ月後の 9 月 29 日の特別委員会では、大須賀市議は、「前回の特別委員会のときに、体験飛行について参加者を限定できないかという質問をしました。限定の内容は、調布、三鷹、府中の 3 市民に限ると、それ以外の市民は、飛行場の迷惑とは関係ないわけですから、たまたまこの日に来て飛行機が好きだから乗るなんていうことは、地元の市民として不愉快きわまりないという理由で限定していただきたいという話をしたんですが、その検討結果はいかがだったでしょうか。」と述べている。

このように、地元枠というのは、そもそも、日常迷惑を被っている市民への、還元という意味合いで、設けられたものなのである。さらに言えば、飛行場まつりそれ自体も、当初は、普段迷惑をかけている周辺住民への、せめてもの恩返しという趣旨で始まったものであり、「まつり」の時間帯は、離島便も含めて、すべての飛行は禁止されていたものである。

それが、2002 年から、「航空への理解を深める」などという、とんでもない目標を掲げて、体験飛行を実施するなど、反・被害住民のイベントと化していったのである。（うら面へ続く）

連載 あってはならない計器飛行（4）

【前回までの要約】

調布飛行場に計器飛行を導入という計画があるが、「計器飛行はやらない」というのが、都営空港化の際の、都と地元 3 市の重要な合意であった。なぜならば、計器飛行の目的は、「悪天候でも飛ばす」ということに尽きるからである。ところが、最近、「計器飛行が導入されても、たいした変化はない」という、ウソの説が流されている。

「離島便に限る」というウソ

計器飛行を導入しても、「離島便にしか認めないから、騒音は大丈夫」という話がある。本当に、離島便にしか認めないのだろうか。そんな保証は、どこにもない。それどころか、近年の計器飛行に関する動きを見ると、それは事実と反すると言わざるを得ない。

ドクターヘリ問題

例えば、別項で報じているように、今年の 8 月 26 日に、調布飛行場対策協議会は、ドクターヘリ用の大型ヘリの、新規導入を認めてしまった。では、このドクターヘリの場合は、どうなるのだろうか。

そもそも、この計器飛行問題が浮上した背景には、後日記していくように、離島からの、都議会への請願書があった。その中には、現在の離島便は、緊急患者輸送にも使われているので、計器飛行を認めてほしい旨の記述があった。

実際のところ、現在、離島で緊急患者が発生すると、ヘリコプターで、広尾の都立中央病院に搬送している。調布の離島便では、それ相当の検査の必要がある人が、都心の病院に通院する上で、利用しているようで、緊急患者を搬送することは、現実的でない模様である。かつて、緊急患者を搬送したという話のあった際に、病名や病院名を追及したところ、東京都は回答できなかったが、そういうことなのである。ただ、ここで大切なことは、緊急患者輸送という話が、計器飛行という話につながっていったという事実である。これだけは、頭に入れておく必要がある。従って、一旦、計器飛行が認められてしまえば、それをドクターヘリにもという話に進んでいってしまう危険性は、きわめて高いと言わねばならない。

そして、実のところ、問題はそれにとどまらないのである。（続く）

小杉課長が交代

調布市で、飛行場を担当してきた、行政経営部政策企画課の小杉課長が、10 月 1 日付で転任となりました。職務の

性格上、いろいろと賛否はありましたが、まずはお疲れ様でした。後任は、同課からの柏原主幹。

着陸に失敗!! 調布でまた事故

突風にあおられ? 草むらに突っ込む

去る9月26日、調布飛行場で、埼玉県桶川市のホンダエアポートからの小型機が、着陸に失敗し、味の素スタジアム脇の草むらに突っ込むという事故が発生した。調布飛行場管理事務所の発表によると、機体は北側から着陸を試みたが、突風のため、うまく行かず、滑走路をバウンドしたため、再浮上を試みたところ、速度が上がらず、滑走路をオーバーランして、緑地帯で停止したとのことである。



着陸に失敗した事故機
後方は味の素スタジアム

再発防止策は?

事故原因は、正式には、航空・鉄道事故調査委員会から、後日発表されるはずであるが、ここで今考えられる問題には、なぜ突風が吹きそうな天候なのに、着陸しようとしたのか、というのが。着陸に許可を与えたのか、それとも、管制官がいないために、不許可という手続きが採れなかったのか。あるいは、全く天候を把握できていなかったのか。この辺のところは、再発防止策が取れるかどうかに関

わってくるだけに、注視していかなければならない。

何のために来たのか

ここでもう1つ、見落としてならないのが、その飛行目的である。調布飛行場では、給油のみを目的とした飛行は、原則禁止されている。しかし、この飛行機は、調布に少々滞在した後、関西方面に向かう予定に

なっていた。給油目的なのではないかということで、調査してみた。しかし、謎は深まるばかりであった。

詳細については、さらに調査を進めた上で、記載していくが、少なくとも、現時点で言えることは、調布飛行場管理事務所に残されて記録は、着陸時間も含めて、デタラメであったということである。

一応、飛行目的は、所長の話によれば、整備ということであったが、申請書には、何も書かれていなかった。しかも、大阪の八尾空港へ、整備をしに行く途中、立ち寄ったという話であったが、そうであれば、調布で整備する必要はないであろう。

古い機体なので、本当に八尾まで飛べるかどうかの確認に来たという話もあったが、そんな機体であれば、そもそも、来させてはならないはずである。

いずれにしても、今後も調査を続け、続報をしていくつもりである。

体験飛行を1.5倍に増加

ドクターヘリ導入も容認

(おもて面から続く)

このように、体験飛行に地域枠を設けた目的は、「飛行機が好きだから乗るなんていうことは、地元の市民として不愉快きわまりない」から「制限を加え」ということなのは、明白であり、この目的から大きく逸脱した、今回の暴挙を許すわけには、到底いかない。

ドクターヘリ問題

今回の、もう1つの大問題は、ドクターヘリ用の大型ヘリの導入である。機体の騒音値も大きく、緊急患者輸送ということになると、日の出から日没まで、離着陸が認められる。しかも、市議会の特別委員会でも調布飛行場対策協議会でも、その拡大使用の可能性が指摘され、かつ、その場合、それについては、地元には許認可権がない。なぜならば、地元が相談を受けるのは、新機種

入のときであって、同機種の追加の場合には、協定上、相談ということにはならないからである。

さらに、ドクターヘリが、計器飛行を求めてくる危険性も、否定できない。緊急患者輸送に必要だとか言って、主張してくることは、大いにあり得ることなのである。離島便の経過を見ても分かるように、「軒を貸すと母屋を乗っ取る」ようなことをするのが、調布飛行場の歴史なのである。

後日、失敗したと思っても、取り返しのつかないような、不可逆的な決定をする場合には、もっと慎重な対応が必要なのではないか。何とも、軽はずみな決定をしてくれたものである。

雑な医療政策

現在、東京都は、多くの反対を押し切って、都立の八王子小児病院、

清瀬小児病院、梅が丘病院を廃止して、府中の医療センターに統合しようとしている。身近にあってこそその医療施設であって、それぞれの地域に、きめ細かく配置してはじめて、住民の健康と安全が守られるのである。特殊な技術を要する病の場合を除けば、特定の大病院に、広範囲の医療を集中させるというやり方は、大きなデメリットもたらさばかりであろう。

ドクターヘリというのは、基本的に、こういった方向の医療政策の産物であり、飛行場問題を離れて考えてみても、決して褒められたものではない。

医療は、ヘリで運ばれて、初めて受けられるのではなく、それぞれの地域で十全に受けられる方向で、整備されていくべきで、無医村をなくす努力が、まず求められているのである。

★傍聴記★

重大な局面ということで、8月の市議会の特別委員会と、飛行場対策協議会の両方とも、傍聴した。特別委員会では、それなりに、被害住民に配慮した発言もあったが、協議会の方は、本当にひどかった。

K委員は、「極論を言えば、体験

飛行を増やしても良い」などと発言。頭に「極論を言えば」などと付ければ、何を言っても良いのか。被害住民にそっぽを向いて、調布JCの立場を優先させていた。

T委員は、友人から「『ドクターヘリが決まって良かったわね』と言われた」と発言。そんなこと、あろうはずがない。この件については、

関係者以外知らないし、この時点では、まだ決まってもいなかったのだ。さすがに、まずいと思ったのか、後日公表された会議録からは、この部分は削除されていた。

当会のM委員の発言だけが救いであった。「機能拡大させない」等の3原則を守るよう、高らかに主張していた。